西表島　実習記

訪問先：西部診療所
沖縄県八重山郡竹富町西表

レポーター：**渡辺　慶介**
信州大学医学部３年

西表島は石垣島のさらに西約20Kmに位置し，約1800人の人が住む沖縄県で三番目に大きい島だ．トルコ石の色の海と濃緑のジャングルが島を彩るこの島には西部と東部に一つずつの診療所があって，そこに一人ずつ医師がいる．

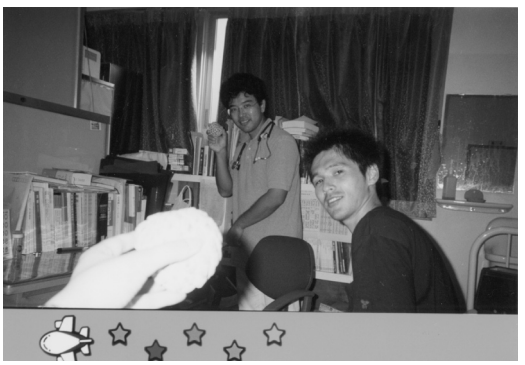
僕が，このうち西部診療所で縁あって実習したのは昨年８月，２年生だった時のことだ．とにかく強烈な印象だった．あまりにも強烈過ぎたため文章がまとまらず，１万字以上書いた感想文は結局未完のままだ．今回良い機会を頂いたので一部でも自分の体験を報告できればよいと思う．

実習でお世話になったのは，診療所に勤務する高良　剛先生．高良先生は，非常に気さくで何でも丁寧に教えてくれる方だった．まだ30代とお若く，地元の青年会でも当時活躍されていた．実習は５日間で，その間，半分は診療所で外来見学し，BLSの指導をしてもらい，待合室で患者さんに話をうかがうなどして過ごした．あとの半分は診療所の外でおこなわれた．診療所の外で，祭りを手伝い，酒盛りをし，たくさんの人と話をする中で，多くの発見と刺激を得ることができた．以下実習日記より抜粋．

８月22日

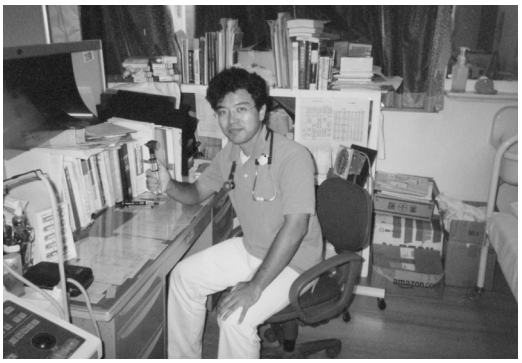
夜10時，租納（そない）公民館で地元青年会の人達と合流する．青年会ではお盆のための踊りの稽古をしているところだった．これが一段落した後，酒盛りが始まる．印象的だったのは，飲みはじめると誰ともなく三線（さんしん　琉球三味線）を引き始め，皆で歌を歌ったこと．しかもほとんどの人が弾けといわれれば民謡の２，３曲は歌えるのだ．初めて聞く沖縄民謡はすばらしかった．この日青年会（高校生から35歳）といいながら年配の人も来ていた．その一人が石垣金星さんだった．石垣さんは，順天堂大でスポーツ健康学

祭りの1コマ　青年会の皆さんと．左から2人目は，島出身のプロ歌手　千鳥さん



診療所にて　手に持っているのは島のフルーツ（左は先生　右筆者）

海（左より　筆者，先生，筑波大の斎藤さん）



高良剛先生

を学んだ後変遷を経て，1970年代から衰退しつつあった島の文化を再興させようと奮闘してきた方だ．「20何年か前帰ってきたとき，若者がいなくなってアンガマン（お盆の時の踊り）はなくなってしまっており，途絶えてからかなりの時間がたっていた．でも私達帰ってきた若者が，再びそれを始めるとどこからともなく人が集まってみんな踊りをおどった．みんなおぼえていたんだ．」という話が印象的だった．他に印象的だったのは，内地から移ってきた沢山の若者がいて，彼らが集落を支えているということだった．彼らは，西表島の持つ豊かな自然や文化に惹かれるなど様々な理由でここに写ってきた人達だった．この点が普通の過疎の集落とは違うところだった．このため島の人口は少しずつながら増えているという．この日結局３時まで酒盛りは続いた．

８月25日

今日は帰る日だったが，人手が足りないとのことだったので朝から祭りの手伝いに行った．まず，おばあの指導のもとジューシー作りが行われた．火を起こして直径70cmほどの大鍋をかけ米たけのこ，豚肉などを炊き込んで行く．仕上げに大きな桑の葉（？）でふたをしてむらす．というのが大体の流れだった．ちゃきちゃき働くおばあの姿をみていて昨日の祭りの時の金星さんの言葉を思い出した．「ここの老人達は幸せだよ．生きがいだけでなくて死にがいがあるから．都会じゃなくなってるよ死にがいは．」

そのあとトラックの荷台で鍋がひっくり返らないように抑えつつ祭りの会場に向かった．祭りでは，集落対抗の綱引き大会にでた．商品はやぎ一頭．やぎ一頭をかけて綱引き！これは貴重な体験だったがすぐ負けて商品はもらえなかった．その後船で島を後にした．

僕からみた西表は，とにかく生命力にあふれた場所だった．今回，実習という形でこの土地に暮らす人と関われたことでその一部分を分けてもらえたような気がする．それが収穫の一つだ．

すばらしい自然環境と伝統文化に支えられ，集落単位の非常に強いコミュニティの結束がここにはある．その結びつきの強さが，ここで僕が出会った人達が共通に持つ生命力の源泉の一つとなっているように感じられた．そのようなコミュニティのあり方というのは，僕にとってほとんどカルチャーショックだった．「世間を知り，人を知る」ために，これからも多くの場所へ行き，たくさんの人と接したいという気持ちを新たにした実習だった．